

20世紀日本における家族の「親密性」をめぐる解釈の変容

——読売新聞「人生案内」の語りから——

日本女子大学 野田潤

1 目的

本報告の目的は、20世紀日本において家族の「親密性」がどのようなものとして解釈されてきたか／それがどう変容してきたかを、一般の人々の語りから通時的に検証することである。日本の家族の近代性を論ずる際には、欧米の社会史研究から導出された近代家族という概念がしばしば用いられ、成員間の親密さや情緒的関係の重視は、その基本的性質の1つとして注目されてきた。だが欧米と日本の差異を測定するためにも、また日本の中の時代変化を測定するためにも、家族の情緒的関係という概念はさらに分節化されるべきという指摘もある（ノッター 2007、本多 2017）。さらに、近年の個人化社会では愛や親密性の価値が上昇するが、同時に愛や親密性が流動化し実現困難になるとも指摘される（山田 2004 など）。こうした近年の複雑な現状を正確に検証するためにも、一般の人々が語る家族の「親密性」がどう変容したかは重要である。最終的には、それが近年指摘される家族の「個人化」とどのような関係にあるのかという点も視野に入れつつ、分析する。

2 分析の枠組みと方法・対象

対象データは、家族をめぐる一般の人々の認識枠組の変容を検証するという本稿の目的から、読売新聞「人生案内」を用いる。1910年代～2010年代の記事から、家族成員間の関係について言及があるものを選別し、①家族の「親密性」を表現する用語の変化、②「親密性」の具体的内容、③「親密性」の言説の効果（何を正当化／批判したか）を検証する。なお報告者は過去にも「人生案内」を用いた分析を通じ、(A)「家族の個人化」と「子ども」の関係の検証（野田 2008）や、(B)親子関係と夫婦関係の相互浸透にまつわる解釈の変容（家族の情緒的関係の分節化の試論）を示した（野田 2006）。本報告では(B)の内容をさらに広げ、家族の「親密性」それ自体をめぐる認識枠組を検証する。

3 結果と結論

家族の「親密性」を表す言葉やその内容や言説効果は、時代によって変容している。1910年代には「愛」や「家庭円満」の優先度は低かった。1930年代に強調された「愛情」には、強い夫権を黙認させる効果が付与された。1950年代に強調された「愛情」は父母子の排他的空間の遵守を意味し、従来は当事者とされた夫婦以外の人々を非当事者化した。1970年代後半以降は家族関係を「量より質」とする語りが出現し、単身赴任や離婚を正当化する。1990年代以降は家族の「対話」「コミュニケーション」「心の理解」が重視され、回答者を含む一切の他者の介入が否定されるが、こうした語りは、意図せざる自己責任化の進行をもたらす可能性もある。

文献

本多真隆 2017 「近代日本における『家』の情緒：1890～1910年代における伝統的家族像の形成」『社会学評論』68(3), pp424-441.

野田潤 2006 「『夫婦の不仲は親子の不仲』か：近代家族の情緒的関係についての語りの変容」、『家族社会学研究』18(1), pp17-26.

野田潤 2008 「『子どものため』という語りから見た家族の個人化の検討：離婚相談の分析を通じて(1914～2007)」『家族社会学研究』20(2), pp.48-59.

デビッド・ノッター 2007 『純潔の近代：近代家族と親密性の比較社会学』慶應義塾大学出版会.

山田昌弘 2004 「家族の個人化」『社会学評論』54(4), pp341-354.